 情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 5
2016.11

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



特集 作曲／現代音楽 三輪眞弘

→ 自著を語る／人生を変えた一冊／学生に薦める一冊

- 私のイチオシ
- 館長コラム
- お知らせ

特集 作曲／現代音楽 **三輪眞弘** (みわ まさひろ)

この特集では、IAMASの教員に、自著・人生を変えた本・お薦めの本などを紹介してもらいます。

第5回は、研究科長の三輪眞弘教授です。



自宅にて／1987年

→自著を語る 三輪眞弘『コンピュータ・エイジの音楽理論』

ぼくがドイツで活動していた時代に書いた本で、IAMAS誕生の前年に出版された。もう20年も前の「コンピュータ音楽」の本なので、爆発的に進化を続けるデジタル技術時代にこの本がどれほど「時代遅れ」で「古臭い」ものになっているのが緊張しながら再読してみた。何しろ日本語テキスト作成が「ワープロ」専用機からパソコン・ソフトの「一郎」に移行していた頃である。だから、当時最新鋭だった電子楽器用のデジタル・インターフェース、すなわち「MIDI」規格が現役で、この本が前提として多くの技術的な解説が今でも有効なことは驚くべきことだろう。そして何より、その時々「機材」に依存しない、プログラミングと作曲との本質的な関係を伝えようとした自分の主張に今もほとんど変更すべきところがないのは、ぼく自身が成長していないということなのか？ また、各章の間に挿入される4つの「Interludium」と名付けられた「個人的見解・体験」コーナーは、作曲とは何か、テクノロジーとは何かを必死で考えようとした20年前の自分がそこにいて、とても不思議な気持ちになる。折しも「Interludium」で詳しく語られている大学時代の卒業作品「赤ずきんちゃん伴奏器」がこの本と同じ時を経て今年の11月6日に復刻・再演されることになり、今年の「芸術特論A」の授業では（例年のスケジュールを変更して）この作品について紹介したところだった。

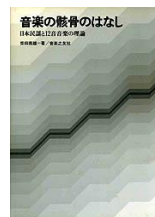
出版から20年を経た今、ぼくが言いたいことはほとんど変わっていない。ただし、この本のように、当時の新しい（デジタル）テクノロジーに何らかの希望が持てたのは、単にぼくが「若かった」せいだけではないと思う。

→人生を変えた一冊 柴田南雄『音楽の骸骨のはなし』

大学生時代に巡り合った本である。全体は2部に分かれており、第一部は「日本民謡について」、第二部は「十二音楽について」。日本民謡を含む、いわゆる「楽曲分析」の本だが、それは音楽の構造をアルゴリズムとして記述することに燃えていた当時のぼくに多大な影響を与えた。柴田が独自に考案した「骸骨図」が、それまで知られていなかった、日本民謡の「時間的構造」を示していることを知り、ぼくはすぐにそれをアルゴリズムとして書き直すことに夢中になった。「もし、日本の東に大陸があったら、どんな音楽が生まれていただろう？」という妄想を抱きながら、先の「赤ずきんちゃん伴奏器」と共に復刻・再演される“2台のピアノと1人のピアニストのための「東の唄」”は作曲された。つまりこの「骸骨図」がこの作品の産みの親である。またそれ以前に、この本の最後、第9節の「総音程音列」で紹介されているアルゴリズム（フローチャート）によって、ぼくは初めて「コンピュータを使って音楽で何ができるか」を知り、「コンピュータによる作曲」を決意したのである。



ジャストシステム／1995年



音楽之友社／1978年

→学生に薦める一冊 ジョナサン・クレーリー『24/7 眠らない社会』

ぼくの周りで最近の「話題の本」などで読んでみた。冒頭は挑発的でとてもわかり易く、その後の展開に大いに期待したものの、読み進んでいくうちにどんどん話題は広がり、内容が高度（難解ではない）になって、自分自身が細部までよく理解できたかという心許ない。それでも、この本を「学生に薦める」のは、内容がすべて「ぼくがもっとも知りたいこと」であること、つまり、テクノロジーに支えられた現代に生きる誰もが「理解しておくべきこと」だと感じたからであり、また、新しい本なので実例がきわめてアクチュアルだからだ。是非、最後まで読んでほしい。読めるものなら。



NTT出版/2015年

私のイチオシ

本学1年生のみなさんにお薦めの本を紹介してもらいました。図書館で展示しますので、ぜひご利用ください。
(似顔絵：後藤祐希さん)



北詰和徳さん

西垣通『ビッグデータと人工知能 可能性と畏を見極める』

昨今の『人工知能』ブームを冷静に捉え、この技術を人と有機的に結びつけるという視点から、人間とコンピュータの未来や可能性を述べている本です。ビッグデータや「人工知能」の技術の背景から課題まで簡潔に説明してくれているので、文系理系問わず読めると思います。テーマは堅そうですが、内容が難しいわけでもないのでは何かのヒントになれば幸いです。
(中央公論新社/2016年)



後藤祐希さん

小林啓倫『今こそ読みたいマクルーハン』

メディア論の大家、マーシャル・マクルーハンの書籍や論文を幅広く取り上げ、考え方を解釈している一冊です。一つのマクルーハンの文章に対して、科学や生物学などの学問領域、あるいはLINEなどの身近な例を用いながら丁寧に説明されているので、わかりやすく、理解の助けになりました。雑誌のインタビューや、講演での発言などを知ることができたのも良かったです。一度是非。(マイナビ/2013年)



竹村望さん

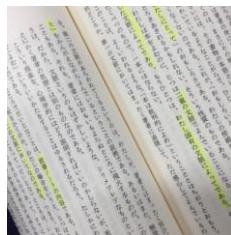
吉田集而『風呂とエクスタシー 入浴の文化人類学』

本書は、入浴について文化人類学的視点から捉えた著書です。世界の風呂にどのようなものがあるか地域ごとに書かれ、風呂の起源や、風呂に与えられてきた意味の変化についても書かれています。日頃当たり前になっている入浴という行為が、どのようなルーツを持つのか、入浴から見る私たちの身体性がどのようなものか、そういったことに思いを馳せることができると思います。(平凡社/1995年)



館長コラム その5 「行間を読む」ことのススメ

「行間を読む」という表現はもはや廃れてしまったかもしれない。英語でも“read between lines”で通用しているが、いまや「行間」という存在すらが危ぶまれているのではないかと。「KY」というのは「空気を読めない」の謂で、人を仲間外れにするため（ということは「コチラ側」がまとまるため）の、実に下卑た言い方だが、さすがに「GY」（行間が読めない）という言い方はしない。理由はふたつある。ひとつは、行間どころか「HY」（本が読めない）連中が増えてきている昨今ではそんな言い方など不要であるからだ。そしてもうひとつは、新しく刊行される多くの書物には、物理的に行間が存在していても、それを想像力で補って「読む」という行為をする必要のないくらい、書き手のサービスで行間もまた埋め尽くされてしまっているからだ。おそらくは、表現に余韻とか間（あわい）といったものを求めない、ネットのテキストが主流になってしまっているために、先行する書物もまた字面どおりの表面的な情報伝達中心主義の代理人と化してしまったのである。しかし、そのような時代になってしまったのだ、後戻りはできない。いまは、ネットが存在する以前の書物を繙き、行間を読む快樂を懐かしむばかりなのである。



梅棹忠夫『知的生産の技術』

お知らせ

→新着図書案内 (iPad) の設置

新着図書案内 (iPad) を学生の生活動線であるRカフェ沿いの廊下に設置しました。この案内はWeb本棚「ブックログ」に登録している新着図書をiPadに表示させ、手軽に確認してもらえるようにしたものです。この案内をきっかけに図書館へ来館してくれればうれしいです。



新着図書案内 (iPad)

→図書館アンケート調査の結果

図書館アンケート調査を2016年9～10月に実施しました。結果について、図書館の満足度は概ね80%以上と高いものの、専門分野の資料が揃っていないと不満の声も寄せられました。充実してほしいテーマ・分野に挙げられたものは、資料収集の際に参考にさせていただきます。今後のイベントでは、「学生が選ぶ一冊」の人气が高く、半数以上の方が参加を希望しました。開催実現に向けて検討したいと思います。

→資料展示、わたしの本棚 (展示) 2016.7～10

資料展示として、芸術祭本展示 (8月～9月)、黄色い表紙の本展示 (9月～10月) を開催しました。また、大学の講義にあわせた資料のほか、話題のポケモンGOや映画『聲の形』の関連資料なども展示しました。

5月に開始した「わたしの本棚」は、学生編が続いています。1年生2名、2年生6名が2～3週間ずつ、プライベートな本棚を図書館に作ってくれました。8月からメッセージコーナーを設け、閲覧者の反応が出展者に伝わるようになりました。出展者を引き続き募集中ですので、興味のある方はご一報ください。



黄色い表紙の本展示

→【修士論文執筆対応】貸出冊数上限を14冊に

修士論文を執筆する2年生限定で、2016年12月1日から2017年2月9日（修士論文発表）までの期間、貸出冊数の上限を14冊（通常7冊）に緩和します。図書館資料を活用して、修士論文を書き上げてください。